（『国語学』180集　1995・3・31）

阪倉篤義博士を悼む

築島　裕

平成六年十月二十二日、京都大学名誉教授、国語学会名誉会員阪倉篤義博士は、御病気のため急逝された。博士が、御生前に我が国語学会において果された絶大なる御業績を偲び、謹んで哀悼の意を表し奉る。

博士の訃報に接する数日前に、私は新村出記念財団の会議で、御入院中の御様子を伺ひ、御容態は峠を越されたとのことであつたので、早晩、お元気なお姿の博士に再びお目にかかれるであらうと信じてゐた矢先のことであり、我が耳を疑ふほどであつた。

阪倉篤義博士は、昭和三十九年から五十三年まで連続十五年間と、同五十七年から六十二年までの六年間と、前後二十一年間の永きに亘つて、国語学会の理事の任に在られ、特に昭和六十年から六十二年までの三年間は、代表理事の重責を果された。又、昭和四十三年から四十四年にかけては、編集担当理事として、活躍された。この間、学会創立当初から理事であられた、故遠藤嘉基博士の後を承けて、関西地区における代表として、この全国学会の発展のために果された御業績は、誠に計り知れないものがあつた。

阪倉博士との個人的なお付合が、何時頃からあつたのか、定かでないが、学生時代から『国語・国文』の御論文などを貪るやうに拝読したことは、今も記憶に新しい。弱輩の私が国語学会の事務を担当するやうになつたころには、既に学界の第一人者と

して活躍して居られた。昭和三十年に出版された国語学会編の『国語学辞典』では、その編集委員の一人として尽力されたのであるが、小生もその末席を汚して御一緒に合宿や会議などを重ねた。その巻末の付録の中で、「国文法諸説対照表」は、特に博士の発想に基づいて、博士が中心となつて執筆されたのであり、その周到適切な成果は、現在に至るまで、学界から高く評価されてゐるものである。

昭和四十三年から編集担当理事に就任された際、学会の事務室が東京にあることなどの理由で、小生が編集主任として連絡係の役をお手伝したことがあつた。至らぬことばかり多かつたのに、終始温かく接して下さつた御厚情は、何時までも忘れることが出来ない。

前述の如く、昭和六十年には国語学会の代表理事となられ、国語学会創立四十年記念事業の一環として、前期に引続き、国語学研究文献目録の作成事業を推進され、文部省の科研費(試験研究)が交付された。その結果、研究は大いに進捗し、成果の内の、相当の部分が公開出版されるに至つた。この事業は、実質的には、国語学会と国立国語研究所との共同事業であり、国語学会としても、その総力を結集しての空前の大事業であつた。博士の後を承けて、小生が代表としてその事業を継続させて頂いたが、博士の御尽力と御苦心の迹がつくづくと偲ばれたことであつた。

博士は又、新村出記念財団の理事長を、多年に亘つて最期まで務められ、草創期の幾多の困難を乗り越えて、並々ならぬ努力を傾注されて、この財団の基礎を確立された。この財団は、京都大学名誉教授故新村出博士の業績を記念してそれを後世に伝へる目的で設立されたもので、国語学、言語学に関する優れた業績を顕彰して新村出賞を贈呈し、前途有為の研究者に研究助成金を、又、刊行の困難な学術業績に刊行助成金を交付する、などの事業を行ひ、更に新村出博士の蔵書重山文庫を整理して研究者に公開するといふ、多角的な運営をされてゐる。この間、理事長としての博士の御尽力は真に絶大なもので、阪倉博士ならではとても今日の盛大な活動は実現しなかつたと言つても過言ではないであらう。小生は、発足時からその理事を拝命し、会議などでお目にかかる機会が多く、阪倉博士の敬愛される御人柄並びに優れた御仕事に直接に接する機会が人一倍多かつた。繰返しになるが、博士の温厚篤実な御人格は、万人の敬仰の的であつたし、その管理責任者としての事務的処理の能力の抜群であられたのは、この他にも、京都日本語教育センター理事長としても御活躍して居られたことからも察せられるところである。更に又、この数年間、金田一賞の選考委員会でも同席させて頂く機会があつたが、常に説得力ある、妥当適切な判断を下され、敬服の至であつた。

しかし、言ふまでもなく博士の真骨頂は国語学者としての輝かしい業績である。博士の研究の中心は、古代国語の語彙論、文法論であつたが、幅広い、しかも柔軟な視野に立たれ、多くの後進の研究者に指針を与へられた。

『語構成の研究』は、昭和四十一年（一九六六）の刊行であるが、博士が若年以来、特に関心を注がれ、古代国語の語構成の分析について、慎重着実な方法に基づき、従来の通説を超えた、大胆な、しかも説得性の高い着実な方法を提示された。それは「音義説」などの因習から脱却した、画期的な語彙研究であつたと見ることが出来よう。

又、『日本語表現の流れ』（平成五年［一九九三］刊）などに集約された、平安時代の和文の係助詞「なむ」の表現価値を始めとする、一連の国語史研究は、文法論と文体論との着実な融和を示す好論として、夙くから学界の定評を得てゐた博士の業績の集成である。

『日本文法の話』（昭和二十六年［一九五一］刊、改訂版昭和四十九年［一九七四］刊）は、初心者向けの著とされながら、その内容は従来の多くの文法論の長所、短所を的確に紹介し、妥当な判断を加へられたもので、学術的にも極めて高度な文法研究書としての評価が寄せられてゐる。

これら博士の諸著書は、何れも平明な行文の中にも深い含蓄を湛へた名著で、後学を益するところ、限りないものがある。

更に又、博士は、日本古典文学大系の中で、『竹取物語』『夜の寝覚』などの校訂註釈を刊行され、何れも国文学史上の屈指の業績としての定評を得て居られる。国語学のみならず、国文学の面にも卓越した成果を挙げられたのであつた。

昭和五十二年五月、博士が還暦を迎へられた機会に、博士の監修のもとに、『論集　日本文学・日本語』五冊（昭和五十二年十一月～五十三年八月、角川書店）が編まれ、合計九十余編の論文が、博士の講筵に列し、又は研究会などで博士と縁のあつた方々によつて提供されてゐる。その内容は、国語学全般はもとより、国文学についても、上代、中古から現代に及ぶ、広い範囲に亘つてゐる。これも博士の広汎な御学識と大きな包容力を備えられた御人柄とを如実に反映した結果と見られよう。

東京に生れ、東京に育つた筆者であるのに、大学卒業以来、四十余年間に亘つて格別の御恩顧、御指導を頂いて来たのは、国語学会を通してのことが主な御縁であつた。国語学会の理事会の意向を承けて、僭越ながら敢へてかやうな一文を草させて頂いたことも、このやうな因縁によるものとして、何卒御理解願ひたい。

博士は享年七十七歳であられた。長寿社会のこの節としては、まだまだお元気で御活躍される筈の御年であつた。学界全体として幾ら惜しんでも惜しみ足りない貴重なお方であつた。御法名は竹風院殿篤義日温大居士の由、洵に故人にふさはしい御名と拝察する。御冥福を心からお祈り申上げて、追悼の辞としたい。

――中央大学教授――